

集合論ノート 0015

有限個の箇所では GCH を好きなように破る その 1

近藤友祐 (@elecello_)

初稿: 2018/10/14

この文書の場合: <https://elecello.com/works.html>

補題 1. \mathbb{P} がすべての基数を保存するならば, $\forall \alpha < o(M) \left(\aleph_\alpha^M = \aleph_\alpha^{M[G]} \right)$.

Proof. 帰納法による. $\alpha = 0$ に対しては明らか. 極限順序数 η について, 帰納法の仮定として $\xi < \eta$ で成り立っているとす. $\sup (= \bigcup)$ の絶対性より, $\aleph_\eta^M = \sup_{\xi < \eta} \aleph_\xi^M = \sup_{\xi < \eta} \aleph_\xi^{M[G]} = \aleph_\eta^{M[G]}$. 後続順序数について. 帰納法の仮定として $\aleph_\alpha^M = \aleph_\alpha^{M[G]}$ を仮定する. $\min (= \bigcap)$ の絶対性より, $\aleph_{\alpha+1}^M = \min\{\kappa > \aleph_\alpha^M : \text{Card}(\kappa)^M\} = \min\{\kappa > \aleph_\alpha^{M[G]} : \text{Card}(\kappa)^{M[G]}\} = \aleph_{\alpha+1}^{M[G]}$ なのでよい. ここで, 中央の “=” について, $\beta \in \{\kappa > \aleph_\alpha^M : \text{Card}(\kappa)^M\} \iff \beta > \aleph_\alpha^M \wedge \text{Card}(\beta)^M \iff \beta > \aleph_\alpha^{M[G]} \wedge \text{Card}(\beta)^{M[G]} \iff \beta \in \{\kappa > \aleph_\alpha^{M[G]} : \text{Card}(\kappa)^{M[G]}\}$ からよい. ここに, 帰納法の仮定 $\aleph_\alpha^M = \aleph_\alpha^{M[G]}$ および基数の保存の仮定 $\text{Card}(\beta)^M \leftrightarrow \text{Card}(\beta)^{M[G]}$ を用いた. \square

注意 2. (1) 「基数の保存」と「濃度の保存」は異なる. \mathbb{P} が基数を保存するからといって, $\mathfrak{c}^M = \mathfrak{c}^{M[G]}$ とは限らない*1. これは, \mathfrak{c} は ω の「冪集合」の「濃度」として定義され, それがどのアレフに対応するかはモデルに依存するから. 例えば, $(\mathfrak{c} = \aleph_1)^M$, $(\mathfrak{c} = \aleph_2)^{M[G]}$ というのも起こり得て, たとえ基数を保存するとしても, というか基数を保存することが仇となって, $\mathfrak{c}^M = \aleph_1^M = \aleph_1^{M[G]} < \aleph_2^{M[G]} = \mathfrak{c}^{M[G]}$. (2) 前述の通り, すべての基数を保存するならばアレフ系列は必ず一致する. しかし, 例えば “ \aleph_2 以上の基数を保存する” とだけ言った場合, アレフ系列が一致するとは限らない. というのも, M の \aleph_1 が潰されて $M[G]$ での可算順序数になり, M の \aleph_2 が $M[G]$ の \aleph_1 になった場合, アレフ系列が有限のところまで 1 だけズレて, すべての $1 \leq n < \omega$ について $\aleph_{n+1}^M = \aleph_n^{M[G]}$ となる*2. \square

定理 3. $M \models \text{ZFC}$: ctm とし, $\kappa = \aleph_\alpha^M$ & $\lambda = \aleph_\beta^M$, $\alpha, \beta < o(M)$ とする.

さらに $(\aleph_0 \leq \lambda < \kappa \ \& \ \text{Reg}(\lambda) \ \& \ \kappa^\lambda = \kappa \ \& \ 2^{<\lambda} = \lambda)^M$ を仮定し, $\mathbb{P} := \text{Fn}_\lambda(\kappa \times \lambda, 2)^M$ と定める. このとき, ある \mathbb{P} -generic 拡大 $M[G]$ が存在して $(2^\lambda = \kappa)^{M[G]}$ が成り立つ.

Proof. Rasiowa-Sikorski の補題を用い, (M, \mathbb{P}) -generic filter G を勝手に取り固定する.

\mathbb{P} はすべての基数を保つ $I := \kappa \times \lambda$, $J := 2 \in M$ として「集合論ノート 0014」*3 の主定理を適用せよ*4.

$(2^\lambda \geq \kappa)^{M[G]}$ $F := \bigcup G$ と定める. 明らかに $F \in M[G]$ である.

*1 というか, 我々の目標は $\mathfrak{c}^M \neq \mathfrak{c}^{M[G]}$ なるモデル $M[G]$ を作ること.

*2 だから, アレフベースで話が進められるのは特殊な場合だけであって, アレフベースで議論を進めるのはあまり良くないのかも...

*3 <http://elecello.com/doc/set/set0014.pdf>

*4 ここでは, κ, λ の基数演算に関する性質が用いられる.

Claim 1. $F: \kappa \times \lambda \xrightarrow{\text{onto}} 2$.

[:] $I, J \in M$ を上の通りとする. ($|I| = \kappa > \lambda$, $J \neq \emptyset$)^M に注意する. 《 F が函数で $\text{dom}(F) \subseteq I$, $\text{rng}(F) \subseteq J$ であること》 G の filter 性より, 各 $p, q \in G$ は函数として両立する. よって, G に属する函数 (のグラフ) たちを張り合わせたものである F は再び函数 (のグラフ) である. 各 $p \in G$ に対して $\text{dom}(p) \subseteq I$, $\text{rng}(p) \subseteq J$ なので, dom と rng については明らか. 《 $\text{dom}(F) = I$ 》各 $i \in I$ に対し $D_i := \{q \in \mathbb{P} : i \in \text{dom}(q)\} \in M$ とする. 各 D_i は \mathbb{P} で dense である. 何となれば: $p \in \mathbb{P}$ を勝手に取る. $i \in \text{dom}(p)$ なら, $q := p$ を証拠に $q \leq p$, $q \in D_i$ なので OK. $i \notin \text{dom}(p)$ とする. $J \neq \emptyset$ なので, 何らかの $j_0 \in J$ が取れる. $q := p \cup \{(i, j_0)\}$ とすれば, ($|q| < \lambda$)^M より $q \in \mathbb{P}$ で, $q \leq p$, $p \in D_i$ なので OK. $I \subseteq \text{dom}(F)$ を示すために $i \in I$ とする. G の genericity より, 元 $q \in G \cap D_i$ が取れる. $i \in \text{dom}(q) \subseteq \text{dom}(F)$ なので OK. 《 $\text{rng}(F) = J$ 》各 $j \in J$ に対し $R_j := \{q \in \mathbb{P} : j \in \text{rng}(q)\} \in M$ とする. 各 R_j は \mathbb{P} で dense である. 何となれば: $p \in \mathbb{P}$ を勝手に取る. $j \in \text{rng}(p)$ なら, $q := p$ を証拠に $q \leq p$, $q \in R_j$ なので OK. $j \notin \text{rng}(p)$ とする. ($|I| > \lambda > |\text{dom}(p)|$)^M なので, $i_0 \notin \text{dom}(p)$ なる $i_0 \in I$ が取れる. $q := p \cup \{(i_0, j)\}$ とすれば, ($|q| < \lambda$)^M より $q \in \mathbb{P}$ で, $q \leq p$, $p \in R_j$ なので OK. $J \subseteq \text{rng}(F)$ を示すために $j \in J$ とする. G の genericity より, 元 $q \in G \cap R_j$ が取れる. $j \in \text{rng}(q) \subseteq \text{rng}(F)$ なので OK. \square (Claim 1)

いま, $\kappa = (\aleph_\alpha)^M = (\aleph_\alpha)^{M[G]}$ であることに注意. 以下, $M[G]$ で議論する. κ 個の函数列 $\langle \chi_\delta : \delta < \kappa \rangle$ を, $\chi_\delta: \lambda \rightarrow 2$, $\chi_\delta(\xi) = F(\delta, \xi)$ で定める [インフォーマルには, G が「 κ 個の『 λ の部分集合』」をコーディングしていると考え (各 χ_δ を λ の部分集合の特性函数と捉えよ). χ たちが本当に κ 個あることを見るには, これらが互いに異なることを示さねばならない].

Claim 2. $\forall \gamma, \delta < \kappa (\gamma \neq \delta \rightarrow \chi_\gamma \neq \chi_\delta)$.

[:] 各 $\gamma, \delta < \kappa$, $\gamma \neq \delta$ に対し,

$$D_{\gamma\delta} := \{p \in \mathbb{P} : \exists \xi < \lambda (\langle \gamma, \xi \rangle, \langle \delta, \xi \rangle \in \text{dom}(p) \ \& \ p(\gamma, \xi) \neq p(\delta, \xi))\}$$

と定めると, 各 $D_{\gamma\delta}$ は \mathbb{P} で dense となる. 何となれば: $q \in \mathbb{P}$ を勝手に取る. $|\text{dom}(q)| < \lambda$ なので, ある $\xi_0 \in \lambda$ が存在して $\langle \gamma, \xi_0 \rangle, \langle \delta, \xi_0 \rangle \notin \text{dom}(q)$ が成り立つ. $p := q \cup \{\langle \langle \delta, \xi_0 \rangle, 0 \rangle, \langle \langle \gamma, \xi_0 \rangle, 1 \rangle\}$ と定めよ. $p \in \mathbb{P}$ で $p \leq q$ となる. $\xi = \xi_0$ を証拠に $p \in D_{\gamma\delta}$ である.

G の genericity より, 元 $r \in G \cap D_{\gamma\delta}$ が取れる. $r \in G$ より $r \subseteq F$ で, r は F の $\text{dom}(r)$ への制限である. $r \in D_{\gamma\delta}$ より, ある $\xi_1 < \lambda$ が存在して $\langle \gamma, \xi_1 \rangle, \langle \delta, \xi_1 \rangle \in \text{dom}(r)$, $r(\gamma, \xi_1) \neq r(\delta, \xi_1)$ が成り立つ. よって, $\chi_\gamma(\xi_1) = F(\gamma, \xi_1) = r(\gamma, \xi_1) \neq r(\delta, \xi_1) = F(\delta, \xi_1) = \chi_\delta(\xi_1)$ となり, $\chi_\gamma \neq \chi_\delta$ を得る. \square (Claim 2)

Claim 2 より, $\mathcal{F} := \{\{\xi \in \lambda : \chi_\delta(\xi) = 1\} : \delta < \kappa\} \subseteq \mathcal{P}(\lambda)$ とすれば $|\mathcal{F}| = \kappa$ となる. したがって $\kappa \leq 2^\lambda$ を得る*5.

$(2^\lambda \leq \kappa)^{M[G]}$ $\mathbb{P} = \text{Fn}_\lambda(\kappa \times \lambda, 2)^M$ であった.

M で: $\lambda \geq \aleph_0$ より, 「集合論ノート 0012」*6 から $\mathbb{P}: (|J|^{<\lambda})^+ \text{-cc}$ を得る. 仮定より $(|J|^{<\lambda})^+ = (2^{<\lambda})^+ = \lambda^+$ なのだから, 結局 \mathbb{P} は $\lambda^+ \text{-cc}$ をもつ.

$|\mathbb{P}|$ について. $|\mathbb{P}| = \kappa$ である. 何となれば: 一点函数を考えれば明らかなように, $|\mathbb{P}| \geq \kappa$ である. 逆に

*5 こちら向き, すなわち “ $(2^\lambda \geq \kappa)$ ” の証明には, κ, λ の基数計算に関する仮定はほとんど用いられていない.

*6 <http://eleccello.com/doc/set/set0012.pdf>

$|\mathbb{P}| \leq \kappa$ を示す。まず、domainの定め方が $|\kappa \times \lambda|^{<\lambda} = |\kappa \times \lambda|^{<\lambda} = \kappa^{<\lambda} \leq \kappa^\lambda = \kappa$ 通り。そのそれぞれについて、値の定め方が高々 $2^{<\lambda} = \lambda$ 通り。よって、 $|\mathbb{P}| \geq \kappa \cdot \lambda = \kappa$ を得る。

以上より、 $\check{\lambda}$ の部分集合の nice name の総数は高々 $|\mathbb{P}|^{\text{dom}(\check{\lambda}) \cdot \lambda} = \kappa^{\lambda \cdot \lambda} = \kappa^\lambda = \kappa$ 個以下である(「集合論ノート0013」*7)。これらすべての「 $\check{\lambda}$ の部分集合の nice name」を並べ上げ、 $\{\vartheta_\xi : \xi < \kappa\} \in M$ とする。その上で、 $\check{f} := \{\langle \text{op}(\check{\xi}, \vartheta_\xi), \mathbb{1} \rangle : \xi < \kappa\} \in M$ と定める。

$M[G]$ で：(必要に応じて“ $M[G] \models$ ”を明記することもある) $\check{f}_G = \{\langle \xi, \vartheta_\xi^G \rangle : \xi < \kappa\}$ である。よって \check{f}_G は函数 $\check{f}_G : \xi \mapsto \vartheta_\xi^G$, ($\xi < \kappa$)になっている。 $\kappa = (\aleph_\alpha)^M = (\aleph_\alpha)^{M[G]}$ に注意。『任意の s を取り、 $M[G] \models s \in \mathcal{P}(\lambda)$ を仮定する。 $M[G]$ の推移性より $s \in M[G]$ 。よって、ある $\sigma \in M^{\mathbb{P}}$ が存在して $s = \sigma_G$ が成り立つ。 $\sigma, \check{\lambda} \in M^{\mathbb{P}}$ なので、Nice Name Lemma (「集合論ノート0013」*8)により、ある「 $\check{\lambda}$ の部分集合に対する nice name」 $\vartheta \in M^{\mathbb{P}}$ が存在して $\mathbb{1} \Vdash \sigma \subseteq \check{\lambda} \rightarrow \sigma = \vartheta$ が成り立つ。ここで、 $\check{\lambda}$ の部分集合に対する nice name は整列されていたから、ある $\xi < \kappa$ が存在して $\mathbb{1} \Vdash \sigma \subseteq \check{\lambda} \rightarrow \sigma = \vartheta_\xi^G$ が成り立つ。真理補題より、 $M[G] \models s \subseteq \lambda \rightarrow s = \vartheta_\xi^G$ である。 $M[G] \models s \subseteq \lambda$ を仮定していたので、 $M[G] \models s = \vartheta_\xi^G$ 、すなわち $M[G] \models \check{f}_G(\xi) = s$ である。』以上『』の議論より、 $M[G] \models s \in \mathcal{P}(\lambda) \rightarrow \exists \xi < \kappa (\check{f}_G(\xi) = s)$ が成り立つ。すなわち、 $M[G] \models \text{rng}(\check{f}_G) \supseteq \mathcal{P}(\lambda)$ である。両辺の濃度を考えれば、 $M[G] \models \kappa \geq |\text{rng}(\check{f}_G)| \geq 2^\lambda$ となり、所望の結果を得る。□

参考文献

本稿では、主に [5], Ch.IV, §3, §7 を参考にしました。対応する定理番号の明記は行っていません。

- [1] Devlin, K., *The Joy of Sets: Fundamentals of Contemporary Set Theory* (2nd ed.), Undergraduate Texts in Mathematics, Springer, 1993.
- [2] Jech, T., *Set Theory: The Third Millennium Edition, revised and expanded*, Springer Monographs in Mathematics, Springer, 2002.
- [3] Kunen, K., *Set Theory, An Introduction to Independence Proofs*, Vol. 102. Studies in Logic and the Foundations of Mathematics, North-Holland, 1980. 邦訳 [13].
- [4] Kunen, K., *The Foundations of Mathematics*, Vol. 19. Studies in Logic: Mathematical Logic and Foundations, College Publications, 2009. 邦訳 [14].
- [5] Kunen, K., *Set Theory* (rev. ed.), Vol. 34. Studies in Logic: Mathematical Logic and Foundations, College Publications, 2011.
- [6] Schindler, R., *Set Theory, Exploring Independence and Truth*, Universitext, Springer, 2014.
- [7] Shoenfield. J.R., *Mathematical Logic*, Addison-Wesley, 1967.
- [8] Takeuti, G. and Zaring, W.M., *Introduction to Axiomatic Set Theory* (2nd ed.), Vol. 1. Graduate Texts in Mathematics, Springer, 1982.
- [9] Weaver, N., *Forcing for Mathematicians*, World Scientific Publishing, 2014.
- [10] 新井敏康, 数学基礎論, 岩波書店, 2011.
- [11] 菊池誠, 不完全性定理, 共立出版, 2014.

*7 <http://elecello.com/doc/set/set0013.pdf>

*8 <http://elecello.com/doc/set/set0013.pdf>

- [12] 倉田令二郎・篠田寿一, 公理的集合論, 倉田令二郎監修・数学基礎論シリーズ 2 巻, 河合文化教育研究所, 1996.
- [13] K. キューネン (藤田博司訳), 集合論-独立性証明への案内, 日本評論社, 2008. [3] の邦訳.
- [14] K. キューネン (藤田博司訳), キューネン数学基礎論講義, 日本評論社, 2016. [4] の邦訳.
- [15] 田中一之編・著, 数学基礎論講義, 日本評論社, 1997.
- [16] 田中一之編, ゲーデルと 20 世紀の論理学 4 集合論とプラトニズム, 東京大学出版会, 2007.
- [17] 田中一之・鈴木登志雄, 数学のロジックと集合論, 培風館, 2003.
- [18] 田中尚夫, 公理的集合論, 現代数学レクチャーズ (B-10), 培風館, 1982.
- [19] 田中尚夫, 選択公理と数学-発生と論争、そして確立への道 (増訂版), 遊星社, 2005.